

コミュニティ

community
The New Apostolic Church around the world



2021(令和3)年第11号



(論説)

救いに不可欠なもの……………2

(礼拝)

何も無いところから新しく—聖霊の導き…3

(nac.today)

文通相手が兄弟に……………7

(報告)

主任より……………12



日本新使徒教会

救いに不可欠なもの

敬愛する兄弟姉妹の皆さん

人間が生活する中で、本当に大切なものは何か、という問題がよく浮かび上がります。そして、不可欠なものに集中しよう、と忠告されることがよくあります。

イエス様の弟子たちにも学んで実践しなければならなかったことがありました。それは、自分が伝えていることを人々に行き届かせようと思うなら、自らが不可欠なものに集中しなければならない、ということでした。他のすべての物、特に割れや断食に関するユダヤの考えを放棄する必要がありました。そうしたものは救いに不必要だからです。

同じことがこんにちの私たちにも当てはまります。私たちは、イエス・キリストによる救いの知らせを、すべての人々に伝える必要があります。そしてそれを実行するには、不可欠なものに集中しなければできません。人間性、歴史、文化に関わるすべてのことは、救いと関係がありません。キリストによる救いの教えを伝えたいと思うなら、ここを割り切らなくてははいけません。この世の行動規範というものは時代とともに変化する可能性があります、救いの知らせは変化しません。

同様に、私たちの子供たちについても、救いにとって本当に必要なのは何なのかを考



えることが大切です。私たちの生活様式を彼ら子供たちに押し付けたくありません。私たちがかつて神様を体験したように、子供たちに神様を体験してほしいと思います。これが大切なことなのです！

敬具

ジャン＝ルーク・シュナイダー

何もないところから新しく ― 聖霊の導き



スイスのチューリッヒにあるゼーバッハ教会は、コロナ禍の影響で、収容人数が制限されました。しかしながら、仮想的な映像や電話による音声を通じて、世界中で多くの人々が礼拝に参加できました。



ローマの信徒への手紙 8 章 14 節

「神の霊に導かれる者は、
誰でも神の子なのです。」

敬愛する兄弟姉妹の皆さん。ペンテコステのお祝いがいつもと違う方法で行われても、美しく慈しみにあふれた伝統を大切に、聖書朗読をもって始めます。通訳の方に読んでいただきます。

朗読聖句：ヨエル書 3 章 1～2 節

及びエフェソの信徒への手紙 3 章 14～21 節

その後／私は、すべての肉なる者にわが霊を注ぐ。／あなたがたの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、男女の奴隷にもわが霊を注ぐ。

このようなわけで、私は、天と地にあって家族と呼ばれているあらゆるものの源である御父の前に、膝をかがめて祈ります。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださいますように。あなたがたの信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住んでくださいますように。あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となることによって、すべての聖なる者たちと



司式は英語で行われ、ドイツ語に通訳されました。

共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものかを悟り、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れるものすべてに向かって満たされますように。私たちの内に働く力によって、私たちが願い、考えることすべてをはるかに超えてかなえることのできる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々にわたって、とこしえにありますように、アーメン。

敬愛する兄弟姉妹の皆さん。先ほど申し上げたように、まだ通常通りにペンテコステをお祝いすることができません。率直に申し上げて、昨年私は、このような形でペンテコステをお祝いすることになるとは、想像できませんでした。今年、世界中で、教会で、私たち一人ひとりの生活で、説明のつかないことがたくさん起きました。覚悟もしていませんでしたし、まったく予想していませんでした。「どうして神様はこんな事態をお認めになるのか」と思い巡らさばかりでした。率直に申し上げますが、その答えを私たちは知りません。私にもわかりません。誰もわかりません。私たちは神様を理解することができません。神様を信頼しなければなりませんから、そうすることを固く決意します。要するに、神様を確信し、「私たちが願い、考えることすべてをはるかに超えてかなえることのできる方」(エフェ3:20)であることを確信するのです。これが私たちの信仰であり、確信することなのです。神様は、私たちが願い、考えるよりも、はるかに多くのことをなされます。神様に限界は存在しないのです。

神様の愛には私たちの想像をはるかに超える強さがあります。ここで繰り返しているように、「私たちの内に働く力」(エフェ3:20)を通して、その強さを体験することができます。神様は愛であり、私たちに救いをもたらすために働いてくださいます。ペンテコステにおいて、聖霊なる神様は、非常に印

象的な形で、御姿と力をお示しになりました。弟子たちや民衆は、強い風の音を聞きました。舌の形をした火柱を見ました。そして突然外国の言葉でものを語れるようになりました。これらはその力のしるしです。そしてその後も、聖霊の賜物を受けた人々には、強いしるしが伴いました(使徒2:1-4)。これらのしるしには、聖霊が現れて活動したことを人々に明らかにする、という意味がありました。

強い印象を与えたこうしたしるしが現れたのは、一定の期間だけでした。聖霊の働きは、次第に違った方法が採られるようになりました。洗礼と御霊の証印を受けた人々の魂と心での活動が始まったのです。このような形で聖霊は今も私たちに働きかけてくださっております。私たちの救いのために、私たちの内において働いてくださるのです。こうした聖霊の働きによる効果を、私たちは幾分体験することができます。それは、聖霊の活動の下で、私たちのふるまいが変化するためです。信徒のふるまいに変化がみられるため、聖霊による教会内での働きを感じ取ることができるのです。

しかし、聖霊の働きには目に見えない面もあります。聖霊は私たちが清め、聖別し、混じりけのないものとしてくださいます。このことを目で見ることにはできません。神様が私たちの内で強力に働いてくださることを信じるのです。

聖霊は私たちに救いをもたらそうとしておられます。キリスト教に意味を見出せない多くの人は、この概念すなわち救いという考え方と、意見が一致しません。こういう人は、「ただ教会にとどめておきたいだけの方便だろう。この世の生活はひどいもので苦しみでしかないから救われる必要がある、と君たちは言っている。この世は涙の谷だ。この谷を避けるために、人々は教会に通う、というわけだ」と言っています。また別の人たちは、『「あなたがたは悪いから神が罰を与える」と君たちは言っている。罰を受けたくないなら信仰を持つしかない、というわけだね」と言っています。愛する兄弟姉妹の皆さん。彼らが言っていることは、私たちの救いの概念と、まったく違います。キリストは私たちの未来です。私たちの救いとは、イエス様の似姿に変貌することです。私たちはイエス様のようになろうというのです。これが目標なのです。私たちが待ち望む救いなのです。イエス様には罪がなく、いつも心が平和でした。イエス様は暴力にまったく訴えることなくすべてに勝利されました。ご自身に何が起きようと、常

に運命を支配しておられました。完全な形で愛することのできるお方でした。完全な形で愛せるように、運命を支配できるように、暴力に訴えることなく悪に勝利できるように、心が完全に平和であるように、そのためにキリストの似姿に変貌しよう、と私たちは願っているのです。

私たちの救いは逃避ではなく完成なのです！そしてこれこそ聖霊の働きを構成するものなのです。聖霊は、このような形に私たちを変貌させるため、私たちの内において働いてくださいます。聖霊なる神様は創造の霊、新天新地の創造主です。聖霊は私たちの内に、水と聖霊によるバプテスマを通して、まったく新しいものを造ってくださいました。私たちは再び生まれ、キリストにある新しい被造物となりました—これは聖霊による偉大な御業です。

聖霊は力の霊です。私たちをキリストの似姿に変える力があります。聖霊の賜物によって証印を押された人には皆、この力があります。この力は私たちがイエス様に似た者となれる証しです。これに疑いの余地はありません。聖霊は力の霊ですが、この力をご自身は穏やかな使い方をなさいます。私たちに強制するのではなく、導こうとされるのです。何をすべきなのか、そして何をすべきでないのかを、教えてくださいますが、決めるのは私たち自身です。聖霊は力の霊ですが、その力は穏やかです。私たちに忠告や助言をお与えになるのです。

聖霊は動きの霊でもあります。私たちを前進させようとなさいます。もう一度申し上げますが、私たちに強制なさるのではなく、きっかけをお与えになる、ということです。聖霊はイエス・キリストの栄光と神様の愛をお示しになります。神様と交わりを持ちたいという思いを私たちの内に創出してください。私たちを待つ未来について教え、前に進ませようとしてください。キリストの本質を明らかにし、私たちに自身への働きかけを勧め、「あなたならできる。前に進みなさい。止まってはならない」とお告げになります。聖霊は動きの霊なのです。

聖霊は、創造、力、動きの霊なのです。聖霊に導いていただきましょう。聖霊が鼓舞なさることに従いましょう。聖霊から告げられることを実行するならば、イエス様に似た者となることができます。これについて何らの疑いもないことは明らかです。私たちは力をいただきながら、聖霊のお告げを実

行するのです。

聖霊は新しい被造物の創造主である、と申し上げましたが、この点について少し詳しく述べたいと思います。創造主とはどういう意味でしょうか。聖霊は、それまで存在していないものをお創りになるのです。全く新しいもの、それまで知られていないものをお創りになります。それを無からお創りになるのです。神様はこの方法によって、無からこの世をお創りになりました。これは理解しがたいことです。無から何かを創り出すことなど、人間にはできません。

聖霊は全く新しいものをお創りになります。それは、キリストの花嫁です。キリストは教会を設立されましたが、それを完成させようとしておられます。御国に入る人は、イエス様と似た者になります。人間の目で見れば、まだそれが実現していないこと

を認めざるを得ません。目に見えるものとしての教会とそれに所属する人々は、完全とは程遠い状況です。しかし、創造主なる聖霊を信頼するならば、それを成し遂げてくださいます。そして聖霊に導いていただくならば、この創造の業に貢献することもできます。聖霊にしっかりと導いていただくならば、あらゆる隔たりを克服することができます。つまり赦し、和解させてもらえる、ということです。私たちは強者と弱者とを融和させることができます。そして互いに愛し合い、仕え合うことができます。まだそれができていないからといって落胆しないでください。教会は完成していきまますし、完成すればキリストのお望み通りになるのです。聖霊に導いてください。そうすればこの創造の業に、主の御旨にかなう素晴らしい教会の設立に貢献することができます。聖霊には、私たちがそれまで認知していない新しいものを創出する力があるのです。

過去数か月間に、たくさんの方が起きました。生活が全く変わってしまったたくさんの兄弟姉妹の皆さんのことを、私は存じております。愛する人に先立たれたり、重篤な病気を患ったり、人生で予想しなかった変化が起きたりしたためです。あるいはこのコロナ禍そのものためです。そして今、覚悟していなかった全く新しい状況に対処しなければなりません。路頭に迷っている人がたくさんおります。どうすればいいのかわからないでいます。聖霊の力を信じてください！まったく新しい状況に直面しても、皆さんが幸福や平和や喜びさえも得られる方法や手段を見つけてください。こう

キリストの愛は 我らの想像より はるかに強力

して新しい状況になったからといって、聖霊が皆さんを救ったりキリストのかたちに変貌させたりできなくなるわけではありません。創造主なる聖霊の力を信じてください。成し遂げてくださいます。

また、何一つ変化がないことに悲しんでいる兄弟姉妹の皆さんのことも、存じております。極めて困難な状況で暮らしておられるすべての方々に、思いを馳せます。このような方々は暴力、犯罪、そしてヨーロッパに住む私たちには想像もつかない状況に対処しなければならないのです。このような方々は、ひたすら変化を望んでいるのです。もう少し平和なら。もう少し安全なら。ところが、何一つ変わらないのです。兄弟姉妹の皆さん。皆さんの状態も承知しています。私も皆さんと共に苦しんでいます。ただ、創造主の力は信じていただきたいと思えます。創造主の御業は、外部の環境によって制約を受けることはありません。このようなひどい環境でも、何一つ変化がなくても、皆さんを救ってくださいます。どれほど悪い状況にあっても、皆さんが救われ、幸福になり、平和と喜びを得られるための道を、創造主は開いてくださいます。創造主による鼓舞と慰めをいただいでください。

教会の環境の改善を望んでいる兄弟姉妹の皆さんのことも、私の思いにあります。教会としてのきちんとした建物、四隅に壁があり、屋根があり、できれば説教台やトイレが備わった建物を希望しておられるということは、存じております。音楽などを演奏できるような楽器があれば、と夢見ておられるかもしれません。それを何年もの間待ち続けているものの、その音沙汰もない。すべての会衆にそれぞれの教会ができるまで、何年もかかるでしょう。がっかりされていることでしょうか。苛立ちや時には驚きを感じておられる方もいらっしゃると思います。私たち教会も全力を尽くしていることはお約束しますが、現実には直視しなければなりません。何年もかかるのです。ただ、聖霊の働きはこんにち存在している物事によって制限を受けているわけではない、ということは忘れないでください。聖霊は、木の下においても、キリストの花嫁を備えてくださいます。大きくて立派な建物と同じく、聖霊の力は働くのです。聖霊に導いていただいでください。聖霊は皆さんに喜び、平和、救いを与えてくださいます。

新たな通常とは違った状況への対処を余儀なくされている国々があります。かつてそこにはたくさんの会衆がありまし

た。ほとんどどの村にもありました。たくさんの教会員がいて、この調子で成長していきたくらうと思っていました。子供たちがたくさんいて、そしてその子供たちが大人になってまた自分の子供を持つようになり、こうして成長が続くものだと思っていました。しかし現実には全く違います。今、私たちは哀愁を漂わせながら過去を振り返ります。「昔、どれだけたくさんの教会があったか覚えている？ 私たちが若かった時はたくさんいたよね？」こうした状況にあるすべての教役者や主任の方々にこう申し上げたい。「そう考えるのもわかりますし、皆さんの悩みも理解できます。聖霊に鼓舞していただきましょう。私たちが前に進ませるよう促してくださいます。過去に固執しないでください。創造主を信じるのです。私たちが幸いにし、平和と喜びを与える新たな道を造り出してください。聖霊に導いていただいでください。御業を必ず完成させてくださいます！」

教会が革命を計画していると考え、それに懸念を抱き、良しと思わない人々がおります。しかしそのような危険は一切ありません。私たちは聖霊に従おうとしているのです。聖霊は、それまで認知されなかった新しい物事をお造りになります。忘れないでください。聖霊は御父と御子と一つです。聖霊はご自身のことを語るのではなく、御子イエス・キリストの教えをお知らせになります。いつも、福音という枠組み、イエス・キリストの教えという枠組みの範囲内で活動されます。イエス・キリストが設立された教会という枠組みの中で、イエス・キリストがお与えになった sacrament と使徒職を用いて活動されます。聖霊はご自身の働きによるものを何一つお造りになりません。聖霊と御父と御子と一つです。聖霊に導いていただきましょう。教会の完成と完全な一致に至らせてくださいます。

最後の所感を申し上げます。私たちは福音を宣べ伝えることにより、御業の完成に貢献することができます。ここでも、それまで存在していなかったものを創出することができます。聖霊に鼓舞していただくならば、既に存在しているものによって制約されることはありません。イエス様については、他教派のキリスト教関係者とはしか語れない、と思うことがあります。しかし考えてみてください。初代のキリスト者たちが福音を伝えたのは、異邦人やユダヤ人に対してだったのです。彼らの持っていた神というものの理解、人生観、救いについての考え方は全く異なっていました。聖霊に鼓舞していただ

我らの救いは
逃避ではなく
完成である！

くならば、私たちも福音を伝えることができます。神様を信じない人々、信念が異なる人々、宗教が異なる人々に、イエス様について語ることができます。キリスト教徒でないから私たちの証しを受け入れない、と考えることはできません。ひたすら聖霊の導きに与ってください! 受け入れてくれる人もいれば、受け入れてくれない人もいます。しかし受け入れるか否かは、私たちに関係ありません。神様の御旨です。勇気を出して聖霊の鼓舞することに従い、すべての人々に福音

を伝えましょう。これが今年度ペンテコステでお伝えしたいことです。私たちの目標は、イエス・キリストのかたちに変貌することです。これは聖霊の成せる業です。聖霊は私たちを変え、私たちの内で働こうとしてくださいます。聖霊は創造、力、動きの霊です。信じて導いていただきましょう。聖霊はいつも私たちに、平和、喜び、救いに与れる道を見つけてくださいます。

まとめ

- 神様は、聖霊に導いていただく人々を救ってくださいます。
- 聖霊は、希望と忍耐を創出してくださいます。
- 聖霊は、自身の救いと人々の救いのために働くよう、私たちに促されます。
- 聖霊は、それまで存在しなかったものを存在させられるように、私たちに備えてくださいます。

文通相手が兄弟に

1960年、ドイツの中学生が東京にあるアメリカの海上運送会社に手紙を出しました。その11年後には、日本で初めての新使徒教会が設立しました。今年、新使徒教会日本小教区は創立50周年を迎えました。

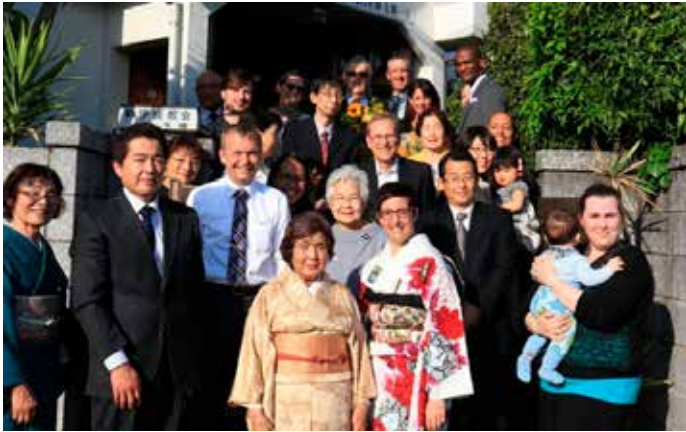
現在、日本は西太平洋教区に属していますが、その前は東南アジア教区、その前はカナダ教区に属していましたが、物語はドイツから始まりました。

始まりは

今は引退したレオンハルト・クロッケンベルガー牧者は、少年時代、日本と外国航船に興味を持っていました。この二つの興味が重なり、この少年は東京にあるアメリカの海上輸送の会社に手紙を書きました。英語で書かれたその手紙は、多くの日本人が英語を学ぶことに興味を持っていたこともあり、日本で歓迎されました。そうして、そのクロッケンベルガー少年からの手紙はいろいろな人に渡っていき、最終的に矢幡賢治氏にたどり着きました。海運とは無縁だった彼は、英語を学びたい一心で、機会があれば英語で人に話しかけていました。矢幡氏がクリスチャンになったのも、列車の中でアメ

リカ人兵士との会話がきっかけでした。矢幡氏とドイツの文通相手との間では、すぐに信仰についてのやり取りが始まりました。当時、アジアには新使徒教会のキリスト教徒がほとんどいませんでした。そのため、教区使徒ミヒャエル・クラウス師は、レオンハルト・クロッケンベルガー氏が日本に牧師を派遣することを提案した際に、すぐに同意したといえます。矢幡氏は、自分の所属するキリスト教の集会に熱心であったが、新使徒の信仰に深い関心を持ち、教区使徒からカナダ訪問の招待を受けました。矢幡氏はカナダを訪問し、1968年に妻のミツギさんと、もう一組の日本人夫婦と一緒に御霊の証印を受けました。

その三年後、矢幡氏は執事に叙任され、すぐに主任として多摩の信徒に奉仕する使命を与えられました。彼は熱心なキリスト者で、あらゆる困難にもめげず、新使徒教会の信仰を日本に広めました。信仰はそこから教区長老ハーバート・パツ



ケ師を通して韓国、台湾、香港、フィリピンへと広がっていききました。

やがて、多摩と松山に教会が建てられました。建設資金の中には、礼拝に招かれた非信者の方が出席して感銘を受け、新使徒教会に尊厳ある祭壇を保証したいとして寄付していただいたものもありました。

日本語での情報

2008年には、日本の教区主任を務めた矢幡教区伝道師が76歳で引退し、世界で最も長く教区主任を務めた人物となりました。現在は、義理の息子である門平彰弘牧司が教区主任として貢献しています。そして日本人三人、ドイツ人一人、アフリカ人二人という「国際的な」教役者チームが彼を支えています。

日本では、教会に何人の会員がいるかを調べるのはそれほど簡単ではありません。ヨーロッパでは、教会の会員資格は登

記所に記録されているので、登記所で確認することができます。しかし、日本では、複数の教会や教派に所属していても問題ありません。例えば、新使徒教会員でも、ご先祖様がお寺に埋葬されているという理由で、菩提寺の檀信徒になっている人もいます。

障害があっても友情がある

日本と隣国の韓国との間には政治的に緊迫した状況がありますが、両国の兄弟姉妹は多くのことを共に行っています。一方の国で行われる特別礼拝には、もう一方の国の兄弟姉妹が招待されます。ヴィルヘルム・レーバー主使徒が来日した際には、ホテルの前の通りで韓国のオーケストラが演奏したこともあった。しかし、許可を得るためには型破りな「武器」が必要で、それは警察署で泣きながら訴える姉妹たちでした。「日本では、みんなができないと言っていることでも、神様が望んでいればできることが多い」と、元日本教区主任のヴォルフガング・アーデ氏が総括しています。

日本と韓国の信仰の兄弟姉妹は、定期的に連絡を取り合っています。若者たちはソーシャルメディアでネットワークを築き、2001年の青年大会を一緒に祝ったこともある。島から島へは、飛行機や船を使ってもそう遠くはありません。また、バスを乗り間違えて船に乗り遅れそうになった人がいた時、新使徒教会にサービスを提供してくれたのは、やはり船会社に勤める教会員でした。そこに働いている教会員がいました。彼は電話で同僚に事情を説明しました。そして、船は若者たちを待っていて、みんなで青年大会を祝うことができました。

(10月14日 nac.today より)

Pen pals become brothers

In 1960 a high school student from Germany wrote to the US Shipping Line in Tokyo. Eleven years later, the first New Apostolic congregation was established in Japan. This year, the New Apostolic Church celebrates its 50-year anniversary in Japan.

Today Japan is part of the Regional Church of the Western Pacific. Before that, it belonged to the Regional Church of South East Asia ever since that Regional Church was established. Prior to that time, the country belonged to the Regional Church of Canada. But the story actually began in Germany...

The beginnings

As a boy, the now retired Shepherd Leonhard Krockenberger was interested in Japan and ocean shipping. This combination of interests led the young brother in faith to write a letter to the US Shipping Line in Tokyo. In Japan, the letter—which had been written in English—met with a welcome response,



because many Japanese were very interested in learning English at the time. So it was that the address was passed on to various people, and eventually ended up with Yoshiharu Yahata. The young man, who actually had nothing to do with shipping, was so eager to learn the language that he spoke to people in English wherever he had the opportunity. That was also how Yahata became a Christian, namely in a train over the course of a conversation with an American soldier. A conversation about faith quickly began to develop between Yahata and his pen pal in Germany as well. At that time, there were very few New Apostolic Christians in Asia. It was for this reason that District Apostle Michael Kraus immediately agreed when Leonhard Krockenberger suggested he send a minister to Japan. Although Yahata was quite committed to his Christian congregation, he took a deep interest in the New Apostolic faith, and thus also accepted an invitation from the District Apostle to come to Canada. There he and his wife Mitsugi were sealed in 1968, together with another Japanese couple.

Three years later, Yahata was ordained to the Deacon ministry, and before long went on to receive the mandate to serve the congregation of Tama as its rector. He was an enthusiastic Christian, who—despite all obstacles—quickly promulgated the New Apostolic faith in Japan, and from there it spread via the later District Elder Herbert Pache even into South Korea, Taiwan, Hong Kong, and the Philippines.

Soon the two churches in Tama and Matsuyama were built. Some of the funds for the construction even came from non-believers in the surroundings who simply wanted to guarantee the New Apostolic Church an altar in dignity because they had enjoyed the divine services to which they had been invited.

Facts in Japanese

In 2008, Yahata, who had in the meantime been serving all of Japan as district rector, was retired at the age of 76—likely as the longest serving district rector in the world. Today his son-in-law, Akihiro Kadohira serves the country as national rector. He is supported in his endeavours by an “international” team consisting of three Japanese ministers, one German minister, and two ministers of African descent.

It is not so easy to determine how many members the Church has in Japan. In Europe one can simply check with the registry office, because church membership is recorded there. In Japan, however, it is no problem for citizens to belong to a number of different churches or denominations at once. For example, there are even New Apostolic Christians there who are still registered with the Buddhist temple because their ancestors are buried there.

Friendship despite obstacles

Although the political situation is tense between Japan and its neighbour South Korea, the members of the two countries have enjoyed many activities together. Before the COVID-19 pandemic, whenever there was a special divine service in one of the countries, the members of the other country were always invited. At one visit by Chief Apostle Wilhelm Leber in Japan, there was even a Korean orchestra playing on the street in front of the hotel. In order to obtain permission for this, however, some unconventional “weaponry” had to be deployed, namely in the form of a sister who pleaded under tears at the police station. Dr. Wolfgang Ade, a former national rector in Japan, sums it up this way: “In Japan, many things happen simply because God decides to make them possible, even though no one thinks they could ever happen.”

The members of Japan and South Korea remain in regular contact. The young people are connected by social media and even celebrated a youth convention together in 2001. It is not far from one island to the other, whether by airplane or ship. And when some of the young people found themselves in the wrong bus and almost missed the JR ferry, it was again a member of the JR company who came to the rescue of the New Apostolic Church. One of our members called the JR travel agency and explained the problem. They called their colleagues on the ship and they decided to show some compassion, and so the ship waited for the young people, allowing everyone to reach their home in time.

Aus Brieffreunden werden Brüder

1960 schrieb ein Realschüler aus Deutschland an die UA-Shipping Line in Tokio. Elf Jahre später bildete sich die erste neupostolische Gemeinde in Japan. Dieses Jahr feiert die Neupostolische Kirche in Japan 50-jähriges Bestehen.



Heute gehört Japan zur Gebietskirche Westpazifik, davor gehörte das seit der Gründung der Gebietskirche Südostasien zu dieser Gebietskirche, davor zur Gebietskirche Kanada, aber begonnen hat die Geschichte in Deutschland...

Die Anfänge

Der heute im Ruhestand lebende Hirte Leonhard Krockenberger interessierte sich als Junge für Japan und die Hochseeschiffahrt. Diese Kombination führte dazu, dass der junge Glaubensbruder einen Brief an die US-Shipping Line in Tokio schrieb. Dort freute man sich über einen Brief auf Englisch, denn viele Japaner sind sehr daran interessiert, Englisch zu lernen. So wurde die Adresse weitergegeben und landete irgendwann bei Yoshiharu Yahata. Der junge Mann, der mit Schifffahrt eigentlich nichts am Hut hatte, war so erpicht darauf, Englisch zu lernen, dass er überall Menschen auf Englisch ansprach. So wurde Yahata auch Christ, als er einmal im Zug einen Missionar ansprach. Zwischen Yahata und seinem Brieffreund in Deutschland entwickelte sich schnell ein Gespräch über den Glauben. Damals gab es in Asien nur wenig Neupostolische. Deshalb sagte Bezirksapostel Michael Kraus gleich zu, als Leonhard Krockenberger ihm vorschlug, einen Amtsträger nach Japan zu schicken. Obwohl Yahata engagiert in seiner christlichen Gemeinde war, interessierte er sich sehr für den neupostolischen Glauben und folgte so auch einer Einladung des Bezirksapostels nach Kanada. Dort wurden er und seine Frau Mitsugi zusammen mit einem weiteren japanischen Ehepaar 1968 versiegelt.

Drei Jahre später erhielt Yahata das Diakonenamt und bald darauf den Auftrag, der Gemeinde Tama als Vorsteher zu dienen. Er war ein begeisterter Christ, der den neupostolischen Glauben trotz aller Widrigkeiten rasch in Japan und von dort aus mithilfe des späteren Bezirksvorstehers Herbert Pache nach Südkorea, Taiwan, Hong Kong und in die Philippinen ausbreitete.

Bald wurden die zwei Kirchen in Tama und Matsuyama gebaut. Die Mittel dazu kamen auch von nicht gläubigen Menschen am Ort, die der Neupostolischen Kirche einen Altar in Würde garantieren wollten, weil sie die Gottesdienste, zu denen sie eingeladen waren, genossen hatten.

Fakten auf Japanisch

2008 kam Yahata, der inzwischen ganz Japan als Bezirksvorsteher diente, mit 76 Jahren als wahrscheinlich dienstältester Bezirksvorsteher weltweit in den Ruhestand. Heute dient sein Schwiegersohn Akihiro Kadohira dem Land als Bezirksvorsteher. Unterstützt wird er von einem „internationalen“ Amtsträgerteam: Drei Japaner, ein deutschstämmiger und zwei afrikanischstämmige Priester.

Es ist nicht so einfach festzulegen, wie viele Mitglieder die Kirche in Japan hat. In Europa kann man einfach im Standesamt nachschauen, weil dort die Kirchenmitgliedschaft vermerkt ist. In Japan kann man problemlos Mitglied bei verschiedenen Kirchen oder Glaubensgemeinschaften sein. Es gibt dort zum Beispiel Neupostolische, die noch immer in einem buddhistischen Tempel gemeldet sind, weil dort ihre Vorfahren begraben sind.

Freundschaft trotz Hindernissen

Obwohl die Lage politisch angespannt ist zwischen Japan und seinem Nachbarland Südkorea, machen die Glaubensgeschwister beider Länder viel zusammen. Bei jedem besonderen Gottesdienst in einem der beiden Länder sind die Glaubensgeschwister aus dem jeweils anderen Land eingeladen. Bei einem Besuch von Stammapostel Wilhelm Leber in Japan spielte sogar ein koreanisches Orchester auf der Straße vor dem Hotel. Damit das genehmigt wurde, musste sogar mit den Waffen der Frau

gekämpft werden (Tränen im Polizeirevier). „In Japan gehen viele Dinge, von denen alle sagen, es ginge nicht, wenn Gott es möglich machen will“, resümiert Dr. Wolfgang Ade, ehemaliger Bezirksvorsteher in Japan.

Die Glaubensgeschwister von Japan und Südkorea stehen in regelmäßigen Kontakt. Die Jugendlichen vernetzen sich über Social Media und haben sogar den Jugendtag 2001 zusammen

gefeiert. Von Insel zu Insel ist es nicht weit mit dem Flugzeug oder Schiff. Und als einige Leute im falschen Bus saßen und beinahe das Schiff verpassten, war es wieder ein Mitglied der Reederei, der der Neuapostolischen Kirche einen Dienst erwies. Ein Glaubensbruder arbeitete nämlich dort. Er rief an und erklärte seinen Kollegen das Problem. Und die ließen sich erweichen und so wartete das Schiff auf die Jugendlichen, sodass alle gemeinsam den Jugendtag feiern konnten.

Des correspondants deviennent frères

En 1960, un lycéen allemand a écrit à l'UA-Shipping Line à Tokyo. Onze ans plus tard, la première communauté néo-apostolique a été créée au Japon. Cette année, l'Église néo-apostolique au Japon fête le 50e anniversaire de son existence.



En 1960, un lycéen allemand a écrit à l'UA-Shipping Line à Tokyo. Onze ans plus tard, la première communauté néo-apostolique a été créée au Japon. Cette année, l'Église néo-apostolique au Japon fête le 50e anniversaire de son existence.

Dans sa jeunesse, le berger Leonhard Krockenberger, aujourd'hui à la retraite, s'intéressait au Japon et à la navigation en haute mer. Cette combinaison a conduit le jeune frère à écrire une lettre à l'US-Shipping Line à Tokyo. Là-bas, ils ont été heureux de recevoir une lettre en anglais, car beaucoup de Japonais sont très intéressés par l'apprentissage de l'anglais. L'adresse a donc été transmise de l'un à l'autre, avant d'atterrir chez Yoshiharu Yahata. Le jeune homme, qui n'était en fait pas du tout porté sur la navigation, était si désireux d'apprendre l'anglais qu'il s'adressait partout aux gens en anglais. Yahata

est ainsi aussi devenu chrétien lorsqu'il s'est un jour adressé à un missionnaire de la « Holiness Church » dans le train. Rapidement, une discussion sur la foi s'est engagée entre Yahata et son correspondant en Allemagne. À cette époque, il n'y avait que quelques rares frères et sœurs néo-apostoliques en Asie. C'est pourquoi l'apôtre de district Michael Kraus a immédiatement accepté lorsque Leonhard Krockenberger lui a proposé d'envoyer un frère du ministère au Japon. Bien que Yahata était très engagé dans sa communauté chrétienne, il s'intéressait beaucoup à la foi néo-apostolique, c'est ainsi qu'il a accepté une invitation de l'apôtre de district au Canada. Lui et son épouse Mitsugi y ont été scellés en même temps qu'un autre couple japonais en 1968.

Trois ans plus tard, Yahata a été ordonné dans le ministère de diacre et a rapidement été mandaté en tant que conducteur de la communauté de Tama. Il était un chrétien enthousiaste, qui a rapidement développé la foi néo-apostolique au Japon puis, de là, et malgré l'adversité, en Corée du Sud, à Taïwan, à Hong-Kong et aux Philippines.

Peu de temps après, deux églises ont été construites à Tama et à Matsuyama. Les fonds pour la construction provenaient aussi de la population locale non croyante, qui souhaitait garantir à l'Église néo-apostolique un autel digne de ce nom, parce qu'elle avait apprécié les services divins auxquels elle avait été invitée.

Les faits en japonais

En 2008, Yahata, qui servait alors le Japon tout entier en tant que responsable de district, a été admis à la retraite à l'âge de 76 ans, sans doute le responsable de district ayant l'exercice ministériel le plus long du monde. C'est son gendre, Akihiro Kadohira, qui sert actuellement le pays en tant que responsable de district. Il est soutenu par une équipe ministérielle « internationale » : trois Japonais, un prêtre d'origine allemand et deux prêtres d'origine africaine.

Il n'est pas si facile de déterminer le nombre de membres que compte l'Église au Japon. En Europe, il suffit de consulter le bureau d'état civil, car l'appartenance à une Église y est indiquée. Au Japon, il est aisément possible d'être membre de différentes Églises ou communautés religieuses. On y trouve par exemple des frères et sœurs néo-apostoliques qui sont toujours inscrits dans un temple bouddhiste parce que leurs ancêtres y sont enterrés.

L'amitié malgré les obstacles

Bien que la situation politique soit tendue entre le Japon et son voisin, la Corée du Sud, les frères et sœurs des deux pays participent à de nombreuses activités ensemble. À chaque service divin spécial dans l'un des deux pays, les frères et sœurs de l'autre pays sont invités. Lors d'une visite de l'apôtre-patriarche Wilhelm Leber au Japon, par exemple, un orchestre coréen a joué dans la rue devant l'hôtel. Pour que cela soit autorisé, il a même fallu combattre avec « les armes de la femme » (c'est-à-dire les larmes dans un commissariat de police). « Au Japon, beaucoup de choses, dont tous disent qu'elles ne sont pas possibles, sont possibles si Dieu veut les rendre possibles », résume le Dr. Wolfgang Ade, ancien responsable de district au Japon.

Les frères et sœurs du Japon et de la Corée du Sud sont régulièrement en contact. Les jeunes se connectent via les réseaux sociaux et ont même fêté ensemble la journée de

jeunesse en 2001. D'une île à l'autre, ce n'est pas loin en avion ou en bateau. Et lorsque certaines personnes se sont trompées de bus et ont failli manquer le bateau, c'était de nouveau un membre de la compagnie maritime qui a rendu service à l'Église néo-apostolique. En effet, l'un de nos frères y travaillait. Il a téléphoné et a expliqué le problème à ses collègues, qui ont cédé, et le bateau a ainsi attendu les jeunes, afin que tous puissent participer à la journée de jeunesse.

拝啓
仲秋の候、新使徒教会の皆様には、ますますご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。
さて、先日は、沢山の野菜や果物、お米をお届けいただき、ありがとうございました。毎年ホームまで持ってきていただき本当にありがとうございます。子どもたちと一緒に、おいしくいただきます。
秋も深まり涼しい日々が続いています。マスクでの生活に、職員も子どもたちもすっかり慣れてきた今日この頃です。子どもたちは敷地内でサッカーや野球をやったり、ホールでボードゲームを楽しんだりして遊んでいます。感染対策を行いつつも、出来るだけいつもの生活が出来るようにと、工夫する日々です。
末筆ながら、新使徒教会の皆様のご健康とますますのご多幸のほどをお祈り申し上げます。

敬具

2021年10月4日

新使徒教会 様

社会福祉法人 基督教児童福祉会
バット博士記念ホーム
園長 寛本和武

intan

今年も収穫感謝祭に皆様から賜りました、神様への感謝の捧げ物は、礼拝後、バット博士記念ホームにお届け致しました。園長先生から、御礼状を頂きましたのでご紹介致します。

コミュニティ

2021(令和3)年第11号・日本新使徒教会発行

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 (E-mail: kadohira.nac@icloud.com)

多摩教会 〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320

Tel. 042-374-0070 (日本小教区本部)

松山教会 〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17

Tel. & Fax. 089-994-3556

新使徒教会国際本部：https://nak.org/

新使徒教会西太平洋教区：https://nacwesternpacific.org/

新使徒教会日本小教区：http://nac-japan.org/

監修：高島 健郎 / 編集担当：松岡 利恭